

氏名	光本 順
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成16年 9月30日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	日本古代の身体表現に関する考古学的研究
学位論文審査委員	主査・教授 新納 泉 教授 稲田 孝司 教授 倉地 克直 助教授 松木 武彦

学位論文内容の要旨

本論文は、弥生時代から古墳時代にかけて、人間の身体がどのように意識されていたかを、身体を表現した遺物や墳墓における副葬品の配置などの詳細な分析から復元しようとしたものである。図表や巻末の資料を含め、A4判266頁におよんでいる。既発表の論文に加筆・修整を加えた章に、新たに書き起こした章を加え、全体として一貫した論文の形に再構成している。

第1章 身体表現の考古学的研究に関する研究史と方法論

欧米と日本における身体にかかわる考古学の研究動向を比較検討し、そうした研究の意義について論じている。欧米では近年盛んに身体にかかわる議論がなされつつあるのに対し、日本考古学ではいくつかの例を除くと、身体性に着目するという視点自体が乏しい。身体の考古学が、歴史的カテゴリーとしての人間像に焦点を当て、そこから社会を追究するという視座をもつことを論じ、従来の研究が政治・経済をはじめとする社会の分析、あるいは社会から人間像を論じる傾向にあったことと対比的に論じている。そうした視点から、関連諸科学の動向を含めて理論的整理を行い、そうした方法論に関する議論を踏まえて、実践的研究に向けての具体的な分析視座を提示している。また、ジェンダー／セクシュアリティについての研究が、有効な分析の視点となることを強調している。

第2章 弥生時代から古墳時代初頭の物質化された身体表現

弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての、物質資料に表現された身体性について論じている。第1節で、土器などに描かれた絵画資料や人形製品を広く検討し、全身像表現や頭部に限定された表現が見られることを指摘・整理している。第2節では、岡山地域を中心に盛行した分銅形土製品を対象に分析し、製作から廃棄にいたる「ライフサイクル」を整理した上で、分銅形土製品がA～Dの4系列に分かれると述べている。そのうちのA系列について、1～4の群に分け、文様表現の組み合わせなどの詳細な検討から、これらが時間的差異を示すものと推定し、全身表現が主体の1・2式（弥生時代中期前葉から後葉）から、頭部主体の3・4式（中期末以降）に移行することが示されている。以上のような検討から、この時期の身体表現は、弥生時代中期前葉から後葉までと、中期末から後期・古墳時代初頭に至る2つの時期に、大きく分けて把握することができることを示している。また、各時期に地域色が認められ、中期の段階には近畿地方を中心に全身表現が分布し、中国地方には頭部のみ、またはそれを強調した表現がみられるが、後期になると、近畿における全身表現が退潮し、北部九州から中国・四国地域、東海、関東にいたるまで、頭部のみ表現が展開したと論じている。

第3章 人物埴輪の身体表現

古墳時代中期中葉から後期にかけて古墳に樹立された人物埴輪について検討している。

第1節では、本論の視点を従来の研究の問題点と対比的に示し、とくにアプリオリな性による区分などに対し、より客観的な個体間の分節化の重要性を強調している。そうした視点から、第2節で、人物埴輪の例が多い群馬県の資料を取り上げ、塚廻り古墳の事例研究では、希少で高位の人物像に、男女の二区分を超えた分節が可能であることを示した。事例から抽出した人物埴輪の一般的特徴は、(1)それまでの時代のものとは比べて写実的であり、かつ上位者の人物像に強いリアリティが求められること、(2)主体的にジェンダーを表す頭部や、行為を表す腕部、階層を示す脚部や腰部というように、身体の各部位が象徴的に編成されることを明らかにしている。第3節の岡山地域の分析では、当該地域の資料を集成するとともに、地域的偏りをもちながら人物埴輪が展開したことと、相対的に上位の階層に人物埴輪が採用されることを明らかにしている。

第4章 死者に関する身体表現

第1章では、古墳などの埋葬施設を取り上げ、葬送儀礼とかがわると推定される副葬品の配置から、死者を媒介とした身体表現について分析している。第1節では、岡山地域を対象に、弥生時代後期から古墳時代前期における副葬品配置の事例を検討し、弥生時代後期の終わり頃以降に、頭部へ副葬品を集中させる配置方法が主流となり、それが古墳時代前期まで継続することを明らかにした。第2節では、畿内を中心とする地域の古墳における副葬品配置を、遺体との関係で整理し、古墳時代前期には、さまざまなカテゴリーの副葬品があまり区別されることなく頭部周辺に配置されることが多いが、中期になると身体の各部位に副葬品のカテゴリーに応じた配置がなされるようになることを明らかにしている。こうした事実をふまえて、副葬品配置の論理について、認知考古学的手法を交えながら広く議論し、古墳時代前期は頭部が重視されるのに対し、中期・後期には全身の身体部位が象徴的に活用されることを論じ、これは、物や埋葬空間の分節化の論理とも連動することを示している。

第5章 日本古代の身体表現の歴史的展開

この章では、以上の分析の総合的考察を行い、当該期の身体表現の歴史性を追究している。第1節では異なる複数の事例研究にみられる時期的類似性を明らかにし、類似した身体観が複数の場や対象において反復的に産出されることを示している。身体観の全体的変遷は大別して弥生時代中期前葉から後葉、中期末から古墳時代前期、古墳時代中期以降という3つの段階として把握できることを示した。第2節では、これまで示されてきた政治的・経済的研究との比較を行い、身体観と社会とのかかわりについて考察した。中期段階には北部九州と畿内という二極構造において、身体表現の地域色を理解することができ、身体表現の特質からみた共同体的／階層化社会的という対立軸が地域の競合関係に対応する可能性を論じている。弥生時代中期末から古墳時代前期の段階は、墳墓祭祀の発達をもたらす基層として階層化と個人の差異化への志向性を示す頭部を重視する身体観が展開したものと考えた。諸変革が列島規模で生じた古墳時代中期から後期については、身体観は持続的様相を示すが、葬送観念の変革などにおいて身体観と類似した様相が読み取れるとした。こうした類似性ととも、身体表現は現実の階層的格差や社会状況とは異なる特徴も産みだすことが指摘され、身体観が単純に社会を反映するものではなく、物質文化形成の起点ともなる可能性について論じている。

学位論文審査結果の要旨

2004年7月1日に学位審査会を開催した。審査会には審査委員の他に約25名の参加があった。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、弥生時代から古墳時代にかけて、人間の身体がどのように意識されていたかを、身体を表現した遺物や墳墓における副葬品の配置などの詳細な分析から復元しようとしたものである。「身体表現」を軸に、多様な資料を時間的にも比較的長いスパンでとらえようとしており、個別資料のそれぞれの分析では読みとりにくい連動した現象を、一貫した視点から論じたところに意義がある。

論文の内容は、身体研究についての海外を含む最近の研究動向について、考古学に限らず広く紹介し研究の意図を整理したうえで、絵画等での表現、分銅形土製品、人物埴輪、および墓における副葬品配置について、それぞれ「身体表現」を軸に検討したものである。分銅形土製品については、山陽地域の資料を中心に編年を再検討し、弥生時代中期末を境に、全身を表現するものから頭部を表現するものへと移行することを明らかにしている。墓における副葬品配置についても、弥生時代後期の終わり頃以降、頭部へ副葬品を集中させる配置方法が主流となるが、古墳時代中期にはそうした傾向が崩れ、中期以降には全身の身体部位が象徴的に活用されると論じている。そのような検討に基づいて、弥生時代中期から人間の頭部に意識が集中するようになり、古墳時代中期以降に身体の各部位が個別具体的な意味をもつようになるという身体にかかわる意識の大きな変化を復元し、そうした変化が権力の構造の変化やそれに対する意識とも連動していると考察している。

この研究は、これまであまり大きな変容を見せないのではないかと想像されていた先史・原史時代の身体にかかわる意識が、社会構造の変化とともに大きく姿を変えていることを示した点や、個別に理解されていた身体にかかわるさまざまな表現の特徴が、原初的な思想ともいべきひとつの意識の構造とかかわりをもつ連動したものであることを示した点に優れた内容をもっている。これは、近年盛んになっている意識の分野への考古学からのアプローチを進めたものであり、日本での本格的な研究は、前例があまり多くないものである。また、伝統的な型式学を用いた精緻な研究を発展させようという意欲も伴っており、こうした研究にありがちな恣意性を極力排除するように努め、結果として一定の高さの説得力を伴った議論となっている。

以上の点で、きわめて斬新で意欲的な研究であると評価されたが、審査の過程では、こうした理解と民衆の実際の意識との関係をもう少していねいに論じる必要があったのではないかという指摘や、遺物編年の手続きになお議論の余地があるという指摘もなされた。また、人物埴輪の研究がまだ必ずしも十分な展開をみせていないことや、論じられた地域が西日本中心であることなど、今後の研究の進展が期待される部分も少なくないことが指摘されたが、そうした点は、本論文の弱点というよりも、むしろ今後の学術的議論の課題であり、研究のいっそうの発展を期待できる部分であるということが確認された。

審査会は、以上のような審査の経過から、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。